

和牛放牧のきた道これからの道

和牛の道は草木を食べ歩く力

上田 孝道

はじめに

我が国には資源がないという共通認識がある。しかし砂漠化しない国土は、無限の資源であると言い換えることができる。歴史を振り返りながら、和牛のこれからの道を探りたい。

1 牛がきた道 (参考資料イラストも参照してください)

牛は、農耕技術と共に大陸や朝鮮半島からもたらされたと考えている。

大和時代の牛は、平地で放牧され、5世紀末には「野を覆うほどに繁殖した」とある。また食料でもあった。

世界に稀なことだが、7世紀から明治維新に及ぶ肉食禁止の歴史がある。仏教の思想とされているが、権力者の米を中心とした食料・経済政策なども思い浮かび、食文化と国民の思想形成に及ぼした影響も大きいと考えられる。

8世紀初頭までには管理規定(監視2人/1000頭)や奨励策(連産の報償)や馬牛籍(烙印)10世紀には国の官牧を39と定めている。

和牛の山地放牧の歴史は、1200年間に及ぶ肉食禁止社会のなかで、稲作や荷役の作業などを支える強健な牛を増産するための仕組みであり、また放牧地が平地から僻地や林間に移ったのは、耕地の開発と里の草が肥料であったことなども関係があるろう。

肉食が解禁された明治維新以後、和牛は役用に加えて肉用の需要が高まり、さらに放牧が僻地や林間に展開された。(参考資料の図1-2)また欧米の技術が崇拝的に導入されたが、ヨーロッパ型の牧草は高温多雨地域には定着しなかった。また和牛と他品種の交雑奨励は、役用能力や肉質の低下など和牛界の混乱をまねき、黒毛・褐毛・無角和種、日本短角種、の品種整理に多労を要している。

日本古来の草原の主役であるシバは、海岸地帯が古里といわれるが、種子が牛の採食・排糞を介して移動し、放牧の拡大や僻地化で生活圏を広げたであろう。牛と共生している水平分布は、九州南部から北海道南部で、垂直分布が標高1800mである。

敗戦後の1955年ごろ、動力機関にその役を譲った和牛は肉用牛へと呼び名を変えた。同時に山地放牧が激減したが、当時の入会放牧地を持つ集落は4,128に及んでいた。

入会放牧地などにはスギやヒノキの造林と改良草地が造成された。しかし木材と畜産物の輸入自由化でその夢がやぶれ、林地と草地の管理が放棄されている例も多い。

自由経済下、食料自給率が40%まで下がり、人も家畜も海外依存度が高い生活をしている。見渡せば農地や里山や山地の荒れ地化が拡大している。

輸入エサの普及が、畜舎での多頭飼育を可能にしたが、繁殖母牛の減少は和牛の危機的現象である。歴史を知り、緑の資源を生かしたヒトとウシの共生の時代である。

生活者は食品がどのような経過でつくられているかにも関心が高い。ウシ達の放牧光景は消費者の望むところとなってきている。

2 もう一つの道

国土の荒れ地化の問題は、予算と機械の力だけでは解決が困難である。この課題解決の一つが、我が国伝統の和牛放牧を復活できる機会でもある。だが野山は公益性の高い空間でもあるから、地域から海岸に至る生活者の同意も視野に入れなければならないが、国民は生活圏の景観を美しくすることや、資源を生かした生業をつくることには異存はない。

それには厳しい「放牧の作法」が必要である。すでにウシ達が草木を食べ歩くことで、地域の生業と、美しい景観づくりに貢献している例がある。

(1) 各地に芽生えてる牛が草を刈る社会システム 映像>

放牧による耕作放棄地の植生管理や里山の草刈り

農村景観の演出と農地保全で食料備蓄機能

若林地放牧による下草刈り

林間放牧・林内放牧であるが「育林放牧」が理解しやすい

放牧による多目的草原

半自然草地の維持管理と国民的公園の演出

野焼き作業の防火帯を牛が管理(モーモー輪地切り)

防火帯づくりの省力化で野焼きの復活と草原維持

総合的な山地管理に牛力を利用

林道と植林の下草刈り、特定の観光スポットも期待

牛の放牧による野性動物の被害防止

繁殖牛の所得と食害の軽減で野性動物との共存

会員組織による歴史的な山岳草原の復活

山岳観光・動物と植物の関係を知る観察・学習ゾーン

櫃取り湿原の牛と植物とヒトの関係

牛が景観植物の多様性を演出している実証例

改良草地のノシバ草地への遷移

傾斜地など維持管理が困難な改良草地の省力管理の道

単位面積の多収から既存の草地を使った低コスト生産

<マイナス現象>

放牧史の中で無意識の内に牛が造った山地芸術の退行現象

ミヤマキリシマの衰退と池や浮島の干陸化 観光資源の消滅

(2) 放牧の作法

放牧の基本 = 草の上で牛が草を食べる環境をつくる。半自然草地や林間放牧の放牧圧はほぼ1頭/ha、放牧圧に比例して、環境に対する負の要因が増す

放牧とは = 牛が草木を求めて自由に歩く、逃げることのできない草木の立場にヒトがかかわり放牧圧を調整する知恵である

草地維持とは = 牛が食べる草木の生活に人が加勢して、また食べない草木を牛と人が攻

撃する陣取り合戦である。

(シバなど牛が食べると元気になる植物、ススキなど牛が食べると無くなる草木、難儀なのは牛が嫌って食べない草木の退治である)

牛の草刈場をつくる = 公の予算も厳しく、過去の常識が使えないこともある。

山地酪農技術とか、蹄耕法や、さらには大和時代からの放牧の知恵を想像することで、安価な放牧地が実現できる。

水田の復元 = 乾燥した耕作放棄地はノシバ草地化が土壌保全性が高いが、食料危機に備えた水田への復元試験が必要である。

(3)	ノシバ草地の特性	と	寒地型草地の特性/その使い分け
	省力・省資源・傾斜地・環境型		資本・緩傾斜・栄養型
	寒地では放牧期間が短い		暖地ではスプリングフラッシュと夏枯れ
	草種の選択/気象と地勢には逆らえない		

日本とヨーロッパの気候の違いと植物の生き様を知る(参考資料の図 1-3)

シバ=痩せ地に適すが・湿潤と日陰は不適(放牧の再開で蘇る、葡匐茎の移植)
パヒアグラス・カーペットグラスなどシバ型(暖地型) = 温暖化?で勢力をましてきた。(高地)
オチャードグラスなど西欧型(寒地型) = 草地更新や施肥管理が容易な地形

寒地型放牧草地の施肥と植生遷移(東北地方など)

適正施肥でオチャードグラス優先、削減でケンタッキーブルグラス優先、無施肥でシバ優先

(4) 牛の能力の活かし方

放牧期間の延長と周年放牧 = 冬季備蓄牧草区、副産物の工サ利用、

常緑樹を冬季の工サ利用、低栄養管理

母牛の栄養管理の習慣を変える/適栄養、栄養的小型化

放牧子牛の代償発育技術の再実証と普及

種付けは放牧地の条件や経営の実状に合わず

牛の選抜は放牧適正も加味(強健、連産、泌乳、気質...)

人工授精と自然交配のシステムを考える

人工授精の多労と草地の裸地化

技術の簡素化(常識を変える)

技術が面に出ると使いにくくなる

技術の進歩がウシを施設に閉じこめ、生産コストを押し上げていることもある

過去の子牛価格は、牛肉の輸入制限時代の政策刺激(家畜導入、肉質血統、過肥、)

ウシとヒトとの学習能力を引き出す(管理の省力)

ウシは野山で生きること野生が復活 だがヒトとの関係が断絶してはいけない

母子の儀式に学ぶ 刷り込み様学習の十効果と一効果から学ぶ

人が牛を知る・牛が人を知る ヒトとウシとの約束

役牛時代の調教技術も活かせる

傾斜と休息場

傾斜は 35 度くらいの例があるが、牧区内の休息場の配置が欠かせない

(5) 牛が草を刈る運営スタイル

試験研究や現地実証(公) 経験の力と普及は比例する

農家などの個人や個人の共同
地元組織や組織の共同
個人会員の組織(全国へ)
法人や株式会社

不在地主も含めた財産管理方式
相互扶助を軸とした集落の合意
(土地・柵・通路・水)

注: 社会科学だが文献が少ない。何れの場合も研究会等を立ち上げる

3 これからの道(牛力利用の道)

和牛史は 1600 年、人の労力の助つ人と山地放牧で共生してきた歴史である。
肉専用の歴史は、わずか 40 年にすぎない。しかも輸入飼料に依存した集約管理の傾向
であり、消費者の賛同も得られにくい。

荒れた野山の管理を、人力・機械力だけにするのは余りにも空しい。

「草の化身」たる牛が、四本の脚で草木を刈り取ることでもかなり解決できる。

そして短く草が刈り込まれた柵田や里山や林地や山岳は、傾斜芸術の演出でもあり、
新しい観光資源の道をも拓くことができる。

和牛を草刈りの助っ人と位置づけることが、そのまま低コスト生産に通じるし、食料
の危機管理マニュアルの実践でもある。

つまり和牛の道はサシ牛肉を食べるだけではない。耕作放棄地や傾斜地に生きる家畜
の姿こそが、和牛肉の多様な味覚をひらくことに通じる。

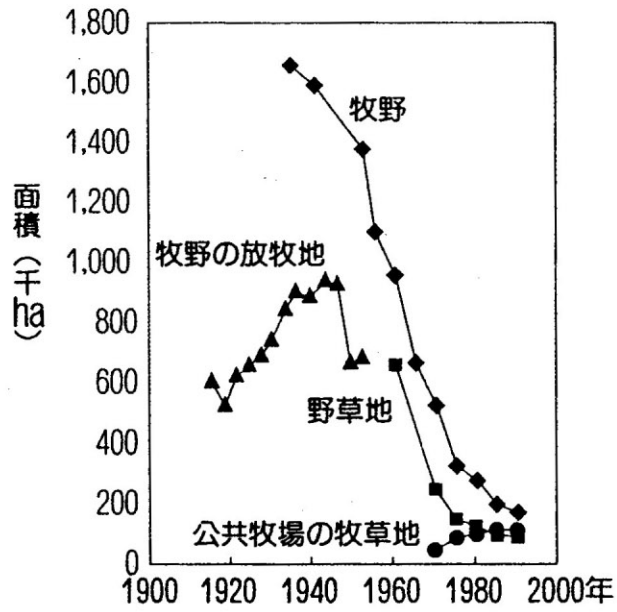
そして、「牛達の野山への解放は人々の解放」でもある。

参考資料

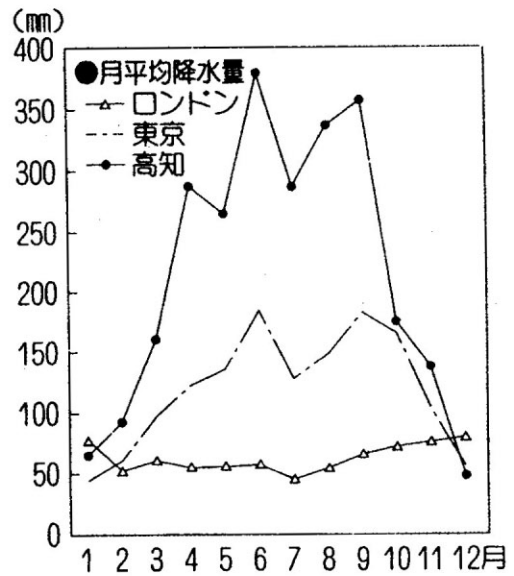
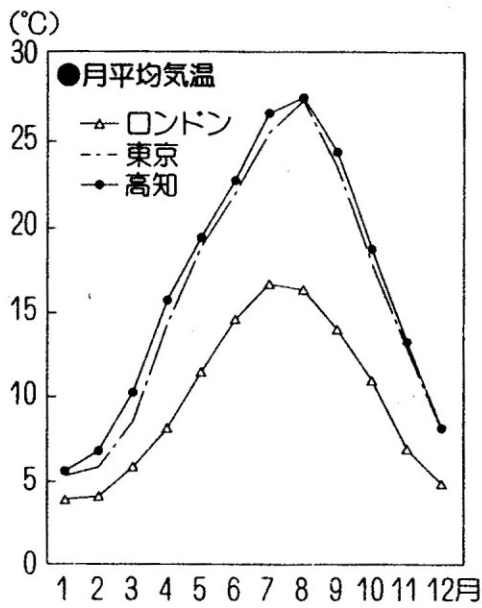
イラスト 和牛のきた道 ~これからの道



(図1-1) 和牛のきた道、これからの道 (イラスト・トミタイチロー)



[図1-2] 牧野面積の変遷(東北農武・須山哲男)



[図1-3] 日本と欧州の気象の比較
(1961~1990年の平均値、「理科年表」より作成)

上田 孝道

デタコタ編集室 (ハウス・オフィス)

780-8063 高知市朝倉 丙 1170-7

EL088-850-0258 TEL・FAX 088-844-5743 e-mail detakota@ybb.ne.jp